後藤　隆徳

山行記録は山へのラブレター

毎月、全国の仲間からたくさんの会報（機関誌・紙）が届く。今、会で交換しているのは１５団体で北は仙台、南は岡山である。

ひと口に会報と言っても様々で、毎月定期的に発行されるものを月報と呼ぶ。これらは性格上、ニュース性と速報性に富んでいる。

従って、山行記録は新鮮で、最新の情報が盛り込まれる。他にその時々のホットな話題、問題、入退会、会員の動向など、お知らせが紙面をにぎわす。

ページ数はまちまちで、多い会は６０ｐ、少ないのは一桁のところもある。一桁では「誌」というより「紙」である。

平均すると２５ｐ位だが、我会は表紙、裏表紙を除いて４０ｐと決めてある。この位が読んで手応えがあり、毎月の編集、印刷、発送経費はまあまあ。これを年報に換算すると、５００ｐ近いわけだから、物凄いボリュームである。

次に年４回は季刊、１～２回は年報と呼ぶ。記録性重視の集大成で、ニュース性、速報性にはやや欠けるが、ページは３桁に届くものが多く、その量感は圧倒的である。会としては月報、年報とも追求出来ると理想であるが、経費もあり両立は難しいのが現実だ。

■

会報を交換する最大の目的は「情報の交換」である。他の労山の仲間が地域でどんな活動をしているかは、最大の関心事である。

会報には、それぞれ「会の表情」があり、会の活動が手に取るように分かる。以前、東京の「ぶなの会」の波木井さんは、会の活力度は例会、山行、そして「定期的機関誌の発行」と提言された。

会報は正に会の活動のバロメータで、活発な会の会報は自ずから、盛り沢山で多様性に富み、他会の者が読んでも面白く、時には感動するものだ。

例えば、仙台の朋友会の会報「ＦＯＵ　ＹＯＵ」１１月号は、この夏、入会した新入会員３名の「新人ガイダンス」を１１／２０さっそく行うとある。内容は会則、山行計画書、会装備の借用方法など。当たり前だが、すぐ対応する姿勢はいかに新入会員を大切にしているか、会の意気込みが伝わる。終了後の懇親会の楽しさも目に浮かぶ。このような会に入会する人は幸せだ。

また、東京の都職山の会の「会報」の巻頭言では、このような時期故に、「平和」について大いに議論していただきたいと提案し、かつ、山登りが出来る社会的条件の整備、例えば「時短」を実現させるとか、海難事故なみの山の救助体制を整備させるとか、実現に向けて具体的行動が出来るようにしたい、と提言している。

会の物事に真面目に真摯に取り組む様は頼もしく、最近このような「硬派」な意見を正面から述べる会が少ないだけに貴重である。

「巻頭言」は意外と少なく他には富士宮・あさぎり山の会の会報「あさぎり」の「コンパス」で斎藤富夫さんが毎号辛口の問題提起をしている。是非、今後も頑張って継続して頂きたい。

もぎたての生の情報が入手出来るのも嬉しい。山梨・山の会の会報「やまなし山の会会報」１１月号にかねてから気になっていた、日向八丁尾根～駒～黒戸尾根の記録が掲載されていた。ここは登れないとされている尾根だけに早速、窓口の雨宮さんにメールで詳しいデータをお願いした。どんな情報より地元の方が地元の山に登ったものが最新、確実、最高である。

その他、風の鳥（はりま山岳会）、雷鳥（町田グラウス）、いごっそう（高知労山）、こだま（相模労山）、あざみ（川崎労山）も頑張っている。

■

この手のことが好きで、既に小学校の６年の頃、ガリ版（ガリ勉ではない）と鉄筆でカリカリ、ガリを切り謄写版で手を真っ黒にしていた。

長い間いろいろと会報等の編集に携わって来たが、先日、機会があり久し振りに２０年位前の記録をながめたが、結構新鮮で面白かった。

とっくに忘れた事もあり、改めて「へエーッ、そうだったっけ」と一人苦笑したものだ。

私達は山に登り何故、文をしたため、記録を残すのだろうか。山岳会の情報交換は別にしても、そこには、自分自身の山への強い「こだわり」があるはずだ。

■

一つ目は「登山における自分史の検証」。いかに趣味の登山とは言え、月に２回も３回も登ったり、生涯で何百回、何千回と続けば、それはすでに人生、生活そのものと言える。己の足跡を自分の手で残していくことは、正に、自身の人生を検証して行くことである。

そうすることにより、そこからまた新しい発見、斬新な発想、注意すべき事柄などが必ず見えてくる。「書くという行為」によって検証は更に深く明瞭に認識される。

二つ目は行為を正確に書き残すことは、言い換えれば「時間を保存すること」である。１０年、２０年経ってからも記録を紐解けば、今日入会した新人も直ちに、時間を超越した経験を共有することが出来る。記録は出来るだけ子細な方が良い。その時は覚えていても、数字など、すぐ忘れるからだ。正確な記述は必ず後に生かされる。

三つ目は「山行記録は山へのラブレター」である。何よりも大好きな山だ。死ぬほど愛してる山だ。山がなければ生きていけない私達だ。

私達はいつも我が儘をいい、気持ち良く山に登らせてもらっている。だから、感謝の気持ちと素直な態度で山行記録を書かなければならない。

決して雑でいい加減な、心の込っていない報告書にしてはならない。仮に、そんなことがあったら、そのうち罰が当たって、山から落ちるかもしれない。

さあ、山に感謝し、敬い、尊び、優しく、愛情を込めて、山への讃歌（ラブレター）を高らかに謳おうではないか。

【NO・65 01・11・05】